

# 北海道日伊協会 会報

VOL.70号 2023年12月

事務局より

## 「実用イタリア語検定 札幌会場」

第57回秋季実用イタリア語検定が10月1日に行われました(中央区かでる2・7)。受験者の内訳は、1級0名、2級1名、準2級1名、3級9名、4級7名、5級5名。検定協会によると、今回の申込者は昨年より10%減少しており、コロナ前に比べると40%以上の減少となっているとの事。コロナ禍での生活環境の変化や渡航制限等の影響は、このようなところにも表れているようです。次回の春季検定はオンラインで実施されます。

## 「第70回プッチーニフェスティバル」

2024年にトスカーナのトッレ・デル・ラゴで第70回プッチーニフェスティバルが開催されます。初演から120年を迎える『蝶々夫人』を記念し、8月31日と9月7日には、安田侃氏が舞台美術を手掛けるオペラ『蝶々夫人』が上演されます。



北海道日伊協会事務局



札幌市中央区大通西14丁目3番地  
みふじビル  
090-1306-1974  
conhkd@aig-hokkaido.com

編集後記

グラビアの写真は、当協会特別会員のエレナ・フラッカーリさんが現地で撮ったものです。特にブドウ畑の見える静寂な丘は、表情を変える空と相まって印象的な光景を織りなしています。

特集としてSalone d'Italiaでの講演原稿の抄訳を掲載したジュリア・バンビーニさんは安田侃彫刻美術館のインターンとして2023年の8月25日から10月3日まで美唄に滞在し、2日後の5日に帰国されました。原稿と写真の「会報」への掲載に快諾していただいたことに感謝するとともに、修復士としてさらなるご活躍を祈念いたします。なお会報への掲載にあたっては、安田侃彫刻美術館の加藤知美さんにお取りはからいをいただきました。

前副会長の金子國彦さんから「会報」の編集作業を引き継いでから今回で3回目の発行となりましたが、まだ手探りの状態が続いています。特にニュースレターLa notiziaとの関係をどうするか、いまだ自分でもクリアになっていません。例えば協会の活動報告が、会の行われた時期によりニュースレターに載ったり、会報に載ったりとバラバラなのは、記録を残すという視点からこれで良いのか疑問に感じます。またニュースレターに載っている会員の近況報告も、会報の「会員だより」とあまり内容が変わらないのが実情です。こうした点について、ご意見やアドバイスがありましたらお寄せ下さい。

なお次の会報(71号)は本協会創立50周年記念の特別号に仕立てることを考えています。50年の協会の営みで思い出に残ることや、会員に伝えておきたいエピソードなどありましたら、是非お寄せ下さい。また協会の歩みを物語る資料は一部しか事務局に残っていないので、会員の皆さんのがいらっしゃいましたら、これも是非ご連絡下さい。

(A. M.)

(原稿の投稿や編集者へのご意見は、[lagoalbano@icloud.com](mailto:lagoalbano@icloud.com)(毛利)宛てにお願いします)



エレナ・フラッカーリ（特別会員）

## ラッダ・イン・キアンティ・クラシコの里 — キアンティ・クラシコの里 —

会報70号目次

- グラビア  
エレナ・フラッカーリ 「ラッダ・イン・キアンティ キアンティ・クラシコの里」
- 特集  
ジュリア・バンビーニ 「ボローニャ —その歴史あふれる街の魅力」
- 活動報告  
菅原明子 「オンラインSalone」  
毛利 晶 「Salone d'Italia」
- 会員便り  
肥田野恵里 「イタリア紀行」  
マリアンナ・チェスパ 「今年の夏も帰国してきました！」  
石田咲子 「国際農業機械展に通訳として参加しました」  
竹中陽佳里 「イタリア留学記」
- 連載  
米倉統一 「G・D・アンジェリスの再考と殉教③」  
河野 準 「(続) イタリアン・ポップス 40年ぶりに聴いてみた」
- 事務局より
- 編集後記



03



Radda in Chianti



Foto:  
Elena Traccari



02

# ボローニヤ - その歴史あふれる街の魅力

## ジュリア・バンビーニ（修復士）

ボローニャはイタリア北部のエミリア＝ロマーニャ州、フィレンツェとミラノを結ぶ道のほぼ真んなかにあります。他のもつと有名なイタリア都市と比べると、おそらくこの都市が話題になることは少なく、ほんの少し聞いたことのある方が何人かいらっしゃるくらいでしょう。イタリアでは、ボローニャは「赤い街」、「学識のある街」、「肥えた街」と渾名されています。

「赤い街」ボローニャ  
「赤い街」と言われるのは、旧市街の建物が何世紀にもわたって作られた工法によります。この街では、煉瓦特に「ボロニヤの煉瓦」と呼ばれる様々なトーンの赤で彩られた煉瓦を用いて建物が建てられました。赤いボローニャを観る最良の方法は、アシネッリの塔に上って街、つまりこの赤い色の建物と屋根の広がりを眼下に見ることです。このアシネッリの塔、それと隣に立つ塔ガリセンダは中世纪に遡り、この街のシンボルになつています。と言うのも、イタリアの都市でこれほど高い中世の塔が今も残るのは、非常に稀だからです。アシネッリの塔は一〇〇メートルほどの高さの先端に上ることができます。先端までは四九八の階段を上る必要がありますが、素晴らしい眺めを堪能できます。

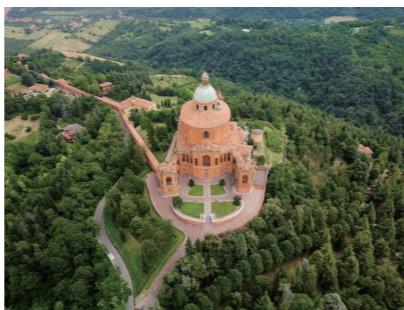
この街に特徴的なもう一つのことが建物の赤を際立たせています。それはボルティコの存在です。ボルティコというのは、建物の一階部分の外側にある開かれた柱廊で、主に太陽と雨から守る役割を果たしています。ボローニャのボルティコは二〇二一年にユネスコの世界遺産に指定されました。私たちボローニャ市民はこのことを非常に誇りにしています。ボルティコは実際に多種多様で、旧市街だけでも総延長は四〇キロほどに上ります。ボルティコは

う場所としてよく使われ、「ネットウーノのお尻の下で」と言うのが合言葉になっています。

ント・ステーファンです。この広場は「七教会の広場」とも呼ばれていますが、それは、ボローニャの司教ペトロ二オガキリストの受難の場所を映し出す七つの教会を建てようとしたという伝説があるからです。しかし実際は、かつてあった異教の神殿のうえに宗教的建造物が時代を追つて幾つも建てられ、今日ひとまとまりになつて存在しているのです。その構造には古いもの、時代を体験したものが持つ魅力があり、建物を囲む壁に年月を追つて街を変えていく時の流れを読み取ることができます。実際、一見したところ均整を欠くその外観が、サント・ステーファノ広場を訪れるひとの注意を惹きつけるのです。この一体化した建物群に場所を提供している広場は砂利が敷き詰められ、引き延ばした三角形をしています。個人的には私はここが、ことにタベは、この街で一番ロマンチックな広場だと思っています。



## サン・ルーカ・ディ・マドンナ▶ (聖堂)



◀ピアツツア・デル  
・ネットウーノ



◀アシネツリの塔(高い方)  
とガリヤンダ



## ピアッツァ・マッジョーレ▶



◀ピアッソ・サント  
・ステーファノ



「赤い街」ボローニャを  
見下ろす▶



や城があり、博物館や冒険に満ちた小道があり、欠かすことのできない逸品料理があります。

「学識のある街」ボローニャ  
ボローニャの二つ目の渾名は、街が文化、芸術そして学問と緊密な関係にあることを表しています。実際ボローニャには西洋世界で最古の大学があり、創立は実際に一〇八八年に遡ります。今日までもイタリア全土、いや全世界から学生を惹きつけ、街に住む学生はおよそ八万人を数えます。そのすばらしいところは、極めて多様な知識と学問を広めるほかに、大學が文化と文化のあいだ、それもしばしば

5

04

非常に異なる文化のあいだで交流と対話が生まれる場となり、そこでおそらくほかでは決して作られない関係が作り出されるという事実にあります。私は、これがボローニャの強みだと考えて、います。なぜなら開放的な精神、つまりおもてなしの心と真面目な好奇心が存在するからで、これは他のイタリアの都市にも常にあるとはかぎりません。

ボローニャには図書館や博物館のような文化施設が他にもたくさんあります。たとえばサラボルサ図書館。これは旧ボローニャ株式取引所の建物のなかにあります。しかしこの建物の起源はもつと古いのです。その証拠に床がガラス張りになっていて、光のハーモニーが織りなす舞台装置のなかで古代の遺跡の発掘跡と様々な文化の堆積跡を堪能できます。このようにして前七世紀のヴィラノーヴァ文化「イタリアの初期鉄器文化」期の最初の定住からエトルリア期に至るまで、そして前一八九年「ボローニャが植民市としてローマ人により築かれた年」以降のローマ期に至るまで、幾世紀もの歴史が蘇っているのです。サラボルサは包括的な情報を蓄積するマルチメディアの図書館です。

「映画館の星の下で」▼



アルキジンナーズイオ▼



A detailed still life painting by Giacomo Cavedini, showing a variety of Italian ingredients and cooking utensils arranged on a dark wooden table. The scene includes a large metal colander, a silver milk canister, a basket of eggs, a bottle of milk, a block of cheese, a large piece of ham, a smaller piece of meat, a bowl of flour, several eggs, a rolling pin, a griddle, a small pan with chestnuts, and a large cleaver. The lighting creates strong shadows, emphasizing the textures of the food and the metallic surfaces.

The image shows two terracotta figures from the 'Mona Lisa' series. The figure on the left is a woman with her mouth wide open, wearing a headscarf and a flowing robe. The figure on the right is another woman in a dynamic pose, also with a headscarf and a flowing robe. Both figures are made of terracotta and have a textured, expressive finish.

ボローニャの食材(トルテッリーニなど)▲

死せるキリストを嘆く二人の女性（ニッコロ・デッラルカ）▲

私の話はここで終わります。皆さん興味を引くことができたら、そしてこの話が刺激となつて、私の街を訪れてみようをいう気持ちをお持ちいただけたら嬉しいです。ボローニャは諸手を揚げて皆さんをお迎えすると私は確信しております。

【（ ）は原文にあるカッコ、「 」は訳者の註です】

多分、この冬のヒルの冬のじつが見えた  
です。一言で言えば、あらゆる機会に乗じ  
て食べる、という訳です。

人生の師だとすれば、ボローニャは最良の教師だと私は信じています。

三一

教育の領域以外でも、ボローニャは季節ごとに文化的な企画が数多く催されており、年間を通して文化活動が休止せず、活気を保っています。一月にはアート・

ているお気に入りの美術作品を紹介したいと思います。それは美術館ではなく教会のなかにあります。死せるキリストを嘆く人々の集団のなかに含まれた二体の彫刻です。作者はニッコロ・デッラルカと言い、この作品は一四〇〇年代後半に遡ります。私が最も感銘を受けるのは右側の二人の「横たわるキリストの足下に立つ」女性、この時代のイタリアの芸術には並ぶものがないほどの劇的迫力と強い感情を伝えているからです。私の考えでは、一四〇〇年にこのような作品が作られたというのは尋常なことではありません。この作品は衣服を描くテラコッタがしながらに見え、これらの女性の絶叫が聞こえそうだが石によって遮られている、そのように感じられます。女性たちの緊張のなかで、まるで筋肉が見えるかのようですが、このかくも激しい感情が人の手で造られたことを考へると、私は感嘆に満たされ、言葉を失います。

では市の図書館が入っています。ボローニャには、それぞれの時代の芸術作品を集めた博物館や美術館もたくさんあります。例えば考古学博物館、国立絵画館（ここにはルネッサンス、マニエリスム、バロックの最も重要なイタリア人芸術家の何人か、例えばラッファエッロ、ペルジーノ、ティツィアーノの作品が収納されています）そしてマンボー（MAMbo = Museo d'Arte Moderna di Bologna）。これは現代美術の美術館で、一九〇〇年代後半から今に至るまでのイタリア美術の歴史を辿っています。

— 7 —

菅原明子（理事）

## オンラインSalone



【ラ・ザンポーニャ La zampogna】  
村(Scanno)・ペスココスタンツォ村(Pescocostanzo)のもの。特にスカノノ村は、ここにハート型の湖(Lago di Scanno)があることもあって夏にはたくさんの観光客が押し寄せる。

アブルッツォ州を取り上げた二回のサローネは、そこに住む人々がいかに「自分達の伝統を守りたい」と強く思っているかを知ると共に、日本では紹介されていないイタリアの地方都市の魅力に触れる貴重な機会になりました。

アブルッツォ州を取り上げた二回のサローネは、そこに住む人々がいかに「自分達の伝統を守りたい」と強く思っているかを知ると共に、日本では紹介されていないイタリア

ザンポーニャは、山羊か羊を材料に作られる楽器で、古くから羊を移牧(※)させる時に使っていた。一説によるとスコットランドのバグパイプより歴史が古いとも言われるという。この楽器には宗教的な意味合いもあり、クリスマスの時期にはザンポニャーと呼ばれる人達が、ザンポーニャを演奏しながらクリスマスの訪れを伝えるために町々を巡るのが風物詩となつていて、マリアンナさんも子供の頃この演奏を聞くとワクワクしたとか。しかし、最近ではそのような伝統的な演奏も少なくなつてきていることから、保存に向けた動きが活発になつているという。



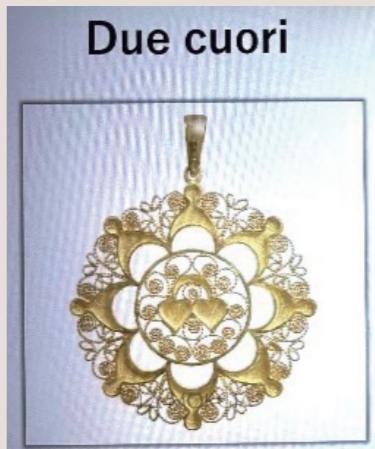
(※)移牧(Transumanza)夏の終わりから秋の初めにかけて、羊を南に向かって約二〇〇kmの距離を十五日間かけて移動させる放牧形態。二〇一九年にUNESCOの無形文化遺産に登録された。



【ラ・プレゼントーサ La presentosa】

前回の続編となるオンラインサローネが九月四日に開かれました。マリアンナ・チェスピさんがオルトーナからライブ配信し、「続・日本人の知らないアブルッツォ州のその伝統と文化」と題して、伝統的なアクセサリーと楽器を紹介しました。(受講者は十二名。うち一般は四名)

プレゼントーサとは、古くからこの地域で受け継がれてきたアクセサリーで、その言葉はプレゼントを表す方言(presentanze)に由来していると言われている。大きさや形は様々だが、中央にハートか三日月が配置され、その周りを星形のギザギザが施されるというデザイン上の共通点がある。元々新郎から新婦へ、または姑から花嫁へ贈られる



ものだったが、G・ダヌンツィオが一八九四年に作品の中で紹介したことから人気が高まった。今では友人同士や洗礼式の時のプレゼントとしても用いられ、女性にとって町の祭りには必ず身に着ける大切な品だ。一番有名なプレゼントトーサは山間にあるスカノノ





# Salone d'Italia

毛利 晶 (副会長)

(問) ポルティコはかなり堅固な  
造りになつてゐるが、単に雨よけ  
のためにサン・ルカ(ボローニャ郊  
外の丘に立つ聖堂)までの遠い  
道のりにポルティコが作られたの  
か。

(答) サン・ルカに至る道のポル  
ティコは巡礼者を導くために建  
てられた。ポルティコには決めら  
れたところでお祈りをする指示  
などもある。

コロナ禍のあと二回目となる  
対面形式でのSalone d'Italia  
が九月三〇日に氏家記念「ども  
クリニック4階ホールで開かれま  
した。「歴史あふれるボローニヤ  
の街の魅力」修復士がみる歴史  
的建造物、ポルティコ」という題  
で、講師はボローニャ出身の美術  
修復士ジュリア・バンビニさん、  
本会会員のエリーザ・ペッリカノ

さんが通訳を務めました。参加者は総数三七名で、うち一般の参加者は十九名でした。

バンビーニさんはボローニヤの美術アカデミーで学んだあと、石の作品とフレスコ画を専門とする修復士となり、ボローニヤのサン・ジャコモ大聖堂のファサードと回廊の絵画の修復保存をはじめ、フィレンツェやポルトガル

(答) ないようだ。(司会者から、扉に完成させるための募金を要請するポスターが貼られていたとの指摘)

講演はバンビーニさんとペツリカノさんのご努力でスムーズに進み、予定していた質問時間も確保することができました。質問時間になされた発言は、おおよそ以下のとおりです。



(問)(ジュリアさんが修復作業に加わった)サン・ジャコモ大聖

(問) ホルティニの所有者は?  
(答) 建物の所有者(但しもち  
ん誰が通つてもよい)。

(問) マッジョーレ広場で行われ  
る映画祭は、雨の場合どうなる  
のか?

(答) ファサードの修復は外から見られるが、美しい教会なので、もし行つたら是非中にも入つて見てほしい。

(問) 北海道と美唄の印象は?

(答) 北海道は山の風景などイタリアではアルト・アディジエ地方に似ているようと思つた。美唄は小さな町だが、さして違和感を持つこともなく過ごせた。

(答) あることはあるが、コンク  
リート製だつたりして旧市街の  
ポルティコのような趣はない。

でも経験を積んでこられまれました。講演の内容は、本号の特集を  
ご覧ください。